

帰国者	①父の氏名 ②家庭裁判所への就 籍許可申立日 ③兄弟姉妹数 ④身元判明状況	父の 出身	性 別	年 齢	出 生 年 月 日	プロフィール
1  高良 アントニオ	①高良 信吉 ②2013年7月5日 ③2(第2子) ④判明済み	沖縄	男	68	1945年 5月28日	父は高良信吉で、父の父がダバオでアバカ栽培をしていたため、父も1930年にダバオへ移住した。戦争が始まる頃、父は単身でマニラへ移り、日本軍で働きはじめた。両親はマニラで出会い、1942年12月2日に結婚。1943年に本人の兄が生まれ、戦争も激しくなってきたため、母は実家のあるラウニオン州へ避難した。父は母と兄に会うために2度ほど母の実家を訪ねたという。1945年に本人が生まれたが、父は日本軍と共に行動していたため、本人の出生後に母の実家を訪ねることはなく、連絡も途絶えた。2011年に、PNLSCの調査により父の身元が判明。父が戦後捕虜として収容された記録の妻の欄には、本人の母の名前が記載されていた。就籍申立許可を求め、東京家庭裁判所で面接を受ける。
2  キヤマ ジョバンニ	①キヤマ ハタ ②2011年7月15日 ③なし ④未判明	横浜	男	67	1945年 10月28日	父はカピス州ピラール町のピラール鉱山にあった日本人が経営する「石原鉱山会社」で主任技師として働いていたキヤマ ハタ。父の同僚には「オガワ」「アモリ」という日本人がいた。戦中は日本軍に従軍。フィリピン兵の妹とて捕えられた母レスレシオン ピリヤシスの処分を任せられた父は、母を救出。その後同棲する。1944年自治会長のもとで結婚、婚姻証明書が作成されたとみられる。本人が生まれる数ヶ月前に、父は他の日本兵と共に日本軍の車両で移動中にフィリピン兵の襲撃に遭い死亡。今回は就籍申立許可を求め、東京家庭裁判所で面接を受けると同時に、父に関する情報を求めている。
3  タキハラ サイジ (日本名:サイジ)	①タキハラ/タケハラ オニシ ②2011年11月30日 ③2(第1子) ④未判明	不明	男	72	1941年 4月3日	父はダバオ市カリナンのバゴボ族の土地でアバカ栽培をしていたタキハラ オニシ。両親はカリナンで出会い、1940年4月3日にバゴボ族の方式で結婚した。1941年に本人、1942年に弟が生まれた。戦争が始まる他の日本人やバゴボ族の人々はみな一緒に山へ避難した。当時3番目の子を妊娠していた母は逃走中に具合が悪くなって死亡、遺骨は父が持っていた。終戦後、父は他の日本人と共に収容所に入った。父は本人や弟も日本へ連れて行こうとしたが、祖父母が反対したため本人たちはダバオに残ることになった。その後父は日本へ強制送還され、以後消息不明。今回は就籍申立許可を求め、東京家庭裁判所で面接を受けると同時に、父に関する情報を求めている。
4  タキモト フランシスカ	①タキモト ワオスケ ②2009年10月6日 ③2(第1子) ④未判明	東京	女	81	1932年 4月2日	父はネグロスオリエンタル州にあった「シュガーセントラル」という砂糖工場で大工の棟梁として働いていたタキモト ワオスケ。父の友人に「山脇さん」という日本人(身元判明済み)がいた。両親は1931年5月13日にマンヨッド町のフィリピン独立教会で結婚。1932年に本人が生まれる。1935年ごろ、母親が本人の弟を妊娠中に父は病気になる、療養のため日本へ帰国した。その後、東京に住む父の親戚から父の死を知らせる電報が届き、父の死を知った。今回は就籍申立許可を求め、東京家庭裁判所で面接を受けると同時に、父に関する情報を求めている。
5  ウエハラ ホビータ	①ウエハラ ミナミ ②2012年12月21日 ③2(第2子) ④未判明	東京	女	67	1946年 2月15日	父は戦前にダバオへ渡り、その後セブへ移住したウエハラ ミナミ。両親は戦争中にセブで知り合い、セブの教会で結婚した。父は憲兵隊で、英語、タガログ語、ビサヤ語ができたので戦争中は日本軍の通訳をしていたという。戦争が激しくなると両親はボホール島へ避難した。1944年にボホール島で本人の姉が生まれ、父は姉のことを「まりちゃん」と呼んでいた。母が本人を妊娠中の1945年に、父は外出したまま帰って来なかった。父が突然消息を絶ったことにショックを受けた母は、生前父のことを語りながら、本人が父について母から話を聞いたのは母が亡くなる数ヶ月前の1992年のことだった。今回は就籍申立許可を求め、東京家庭裁判所で面接を受けると同時に、父に関する情報を求めている。
6  カトウ イニア (日本名:ノブコ)	①カトウ (名不詳) ②2007年7月3日 ③3(第1子) ④未判明	不明	女	79	1933年 10月10日	父はダバオで大工として働き、その後コタバト州へ移住したカトウ。両親はサウスコタバト州(現サラガンゴ二州)で出会い、結婚した。当時のサウスコタバト州には沢山の日本人が住み、現地のチボリ族女性と結婚していた。父の友人には、ノダ、オガタ、久次(母の叔母と結婚)、ゴジマ、サイトウ(父のおじ)らがあった。本人が子どもの頃、父は本人を日本人同士の宴会に連れて行った。本人は父が酒を飲み、日本語の歌を歌っていたのを覚えている。本人は戦前にダバオデルスル州にあった日本人学校に通ったが、戦争が始まるため数ヶ月でやめてしまった。戦争中に母は病死。本人と家族は他の日本人家族とともに避難生活を送った。その時一緒に逃げたワダという日本人は父と親戚だった。父は戦争末期に病気になる避難先の山中で死亡し、遺体はコタバト州ビキットに埋葬された。終戦後、本人は投降し、日本人捕虜収容所に収容され(カトウ ナブコの名で記録あり)たが、叔母の言葉に従いフィリピンに残留した。ワダは日本へ強制送還され、1974年にフィリピンを再訪したワダと本人の妹が再会したが、その後はワダからの連絡もなかった。今回は就籍申立許可を求め、東京家庭裁判所で面接を受けると同時に、父に関する情報を求めている。
7  スズキ ヒビコ	①スズキ ヘイキチ/ヒ キチ ②2013年5月27日 ③なし ④未判明	東京	女	68	1945年 6月24日	父は日本の軍人でキャプテンだったスズキ ヘイキチ(ヒキチ)。両親は日本軍キャンプの近郊のカガヤン州で出会い、1943年5月25日に町役場で結婚した。当時の父は45歳くらいに見えたと母から聞いた。その後母は日本軍キャンプの近くに住み、父が時折訪ねてきていた。その後1945年6月に本人が出生し、父がヒビコと名づけた。本人の名前はこの日本名のみで、フィリピン名はない。日本軍降伏後、父は母を訪ねてきて一緒に日本へ帰ろうといったが、母はフィリピンに残った。1950年代に父の兄弟と名乗る人物が本人家族を訪ねてきたが、母は信用せず詳しい話を聞いていない。今回は就籍申立許可を求め、東京家庭裁判所で面接を受けると同時に、父に関する情報を求めている。
8  ナガタ オリガリオ (日本名:マサオ)	①ナガタ (名不詳) ②2013年7月5日 ③なし ④未判明	熊本	男	67	1945年 9月23日	父はダバオ市カリナン地区でアバカ農業に従事していたナガタ。父は兄弟とともに渡比し、カリナンと一緒にアバカ農業をしていた。両親はカリナンで出会い、バゴボ族の方式で結婚した。母は父との結婚前に前夫と死別しており既に5人の子もがいたが、結婚後は父と父の兄弟と本人の異父きょうだいと一緒に住んだ。父は戦争中もアバカ農業を続けていた。1945年に本人が出生、父がマサオと名づけた。父はそれから約1年後に日本に強制送還されることになり、本人を日本へ連れて行こうとしたが、母が反対したためフィリピンに残ることになった。今回は就籍申立許可を求め、東京家庭裁判所で面接を受けると同時に、父に関する情報を求めている。
9  木村 ロヘリオ (日本名:マサオ)	①木村 喜一郎 ②2010年12月21日 ③なし ④判明済み	広島	男	69	1944年 7月12日	父は1936年に渡比し、マニラ市のサンディエゴ漁業会社に勤めていた広島県出身の木村喜一郎。両親は母の働いていた食堂で出会い、1939年3月15日に母親の出身地又エバエン州の教会で結婚した。戦争が始まる父は会社を辞め、日本軍の憲兵となり、通訳などの仕事をしていく。両親の間には本人が産まれる前に3人の子供が生まれたが、全員出生後まもなく死亡している。1944年に本人が生まれ、父がマサオと名づけた。本人の出生証明書には父の直筆の署名があり、国籍は日本と記載されている。戦後本人と母は父親とは別々に強制収容所に収容された。母が父に面会に行ったときに、父から「日本へ強制送還されることになった」と聞き、父は日本へ帰国した。父の帰国後2年くらいは父からの手紙が届いており、母親も返信していた。その時送られてきた写真は本人が今でも所持している。1986年ごろから父の身元捜しを始め、1998年に日系人連合会によって父の戸籍が判明した。今回は就籍申立許可を求め、東京家庭裁判所で面接を受ける。